

事業2 5, 6年次_研究・臨床実習期間中の海外渡航支援

番号	氏名	渡航先	国・地域	渡航先での受入期間
1	S・R	セント・ジュード・チルドレンズ・リサーチ病院	アメリカ	2023/4/3～2023/4/28

令和5年度岸本国際交流奨学金による海外活動実施報告書

医学部医学科	6年	学籍番号：*****	氏名：S・R
--------	----	------------	--------

渡航先国：アメリカ合衆国
受入機関名：St. Jude Children's Research Hospital
渡航先機関での受入期間： 令和 5年 4月 3日 ～ 令和 5年 4月 28日 (26日間)

私は4月3日から4月28日の1か月間、アメリカ合衆国テネシー州メンフィスにある St. Jude Children's Research Hospital で臨床実習を行った。St. Jude Children's Research Hospital は世界を牽引する小児がん研究病院である。世界中から優秀な医師や研究者が集まり、多くの小児がん患者を救っている。また、創設者のダニー・トーマスの理念に沿って、人種、宗教、家族の支払い能力に基づいて治療を拒否されることはなく、治療に必要な全ての費用は寄付で賄われている。

【実習の目的】

- ・日本とアメリカの医療の違いを理解し、幅広い国際的視野を身につけること。
- ・世界水準の医療設備とシステムの中で最先端の小児がん診療の現場を体験すること。
- ・多くの症例に触れることで、小児がん治療や支持療法に関する知識を深めること。
- ・アメリカにおける小児医療の支援体制やチーム医療の在り方について学ぶこと。

【実習の内容】

私は4月3日から4月14日までの2週間は solid tumor / neuro oncology inpatient service にて、4月17日から4月28日までの2週間は leukemia inpatient service にて実習を行った。Attending doctor は毎週変わり、計5人の先生方に熱心にご指導頂いた。それぞれのグループの fellow や resident の先生方、その他医療従事者の方々にもご指導頂いた。また、毎週木曜日には稲葉先生の外来を見学させて頂いた。

Inpatient service での実習では一度に1~2人の患者さんを担当した。朝、まずは担当患者さんのカルテを確認し、患者さんの状態や検査結果、問題点、今後の方針について看護師やナースプラクティショナー、医師と議論した。そして、患者さんの病室を訪れ、問診や身体診察を行った。その後、朝のミーティングに参加し、担当患者についてプレゼンをした。プレゼンの準備にあたっては先生方からご指導いただきながら、SOAPに基づいた分かりやすい発表ができるよう努力した。ミーティングでは入院中の全ての患者さんにつ

いて情報収集をするよう努めた。ミーティングが終わると、回診に参加した。回診では担当患者さんのご家族に対して病状や方針を説明する機会を頂いた。回診後には医師によるレクチャーや講演会への参加、手技の見学等をした。

【スケジュール一覧表】

月	火	水	木	金
4/3 病棟カンファレンス、回診	4/4 病棟カンファレンス、回診	4/5 病棟カンファレンス、回診	4/6 勉強会、外来見学、回診、レクチャー	4/7 勉強会、病棟カンファレンス、回診
4/10 病棟カンファレンス、回診、骨髄穿刺見学	4/11 病棟カンファレンス、回診、研究室見学、病状説明見学	4/12 病棟カンファレンス、回診	4/13 勉強会、外来見学	4/14 勉強会、病棟カンファレンス、回診
4/17 病棟カンファレンス、回診	4/18 病棟カンファレンス、回診、レクチャー	4/19 病棟カンファレンス、回診	4/20 外来見学、グループカンファレンス、回診	4/21 勉強会、病棟カンファレンス、回診、レクチャー
4/24 病棟カンファレンス、回診、レクチャー	4/25 病棟カンファレンス、回診、レクチャー	4/26 病棟カンファレンス、回診、レクチャー	4/27 病棟カンファレンス、回診、グループカンファレンス	4/28 病棟カンファレンス、回診、研究室見学

【実習の成果】

この1ヶ月間で神経芽腫、髄芽腫、骨肉腫、肝芽腫、ラブドイド腫瘍、ユーイング肉腫、急性リンパ性白血病、急性骨髄性白血病、ホジキンリンパ腫など多岐にわたる症例を経験した。これらの疾患の多くは臨床試験に基づいた化学療法を治療の軸としており、基本的な化学療法のみならず分子標的薬や免疫療法など最新の治療を学ぶことができた。特に白血病に関しては遺伝子変異についても詳しく学習し、興味を抱いた。また、先生方が多くの質問を投げかけて下さったことで、知識を習得するだけでなく、その知識を英語で表現する力を鍛えることができた。小児がん治療を行うにあたって重要な支持療法について実際の診療現場で学んだことも大きな経験となった。特に入院患者さんは化学療法に伴う感染の問題を抱えていることが多く、起因菌の特定や抗菌薬の選択など幅広い分野を学習した。

また、アメリカと日本の診療の違いを直に感じたことは本実習の大きな成果の一つであった。私が一番印象的だったことは多職種が密に連携した **treatment team** として診療にあたる姿だ。ミーティングでは医師や看護師、ナースプラクティショナー、薬剤師、ソーシャルワーカーなど多職種で情報を共有していた。医師が多く仕事を担う日本とは異なり、それぞれの職種が自分の領域について専門性を持ちつつ協力する体制を魅力的に感じた。そして、患者さんや患者さんの家族もそのチームの一員として治療に参加していた。病気に関する情報を医師は詳しく説明し、患者さんの家族は理解した上で治療を進めていた。医療者と患者さんの距離が近く、とても良い関係性を築いている様子を度々見る機会があり、印象深かった。また、チャイルドライフスペシャリストやミュージックセラピスト、スクールプログラムスタッフなどにより、患者自身の社会生活に目を向けた取り組みも非常に充実していた。こうしたアメリカの医療に触れたことで、日本の医療について改めて見直すことができた。

【今後の抱負】

1 か月間日本を飛び出してアメリカで医療を学ぶことは私にとって大きなチャレンジだったが、様々な人と出会い、非常に刺激的で充実した実習になった。見たことがない大きな世界があり、自分の視野が広がる貴重な経験をさせて頂いた。また、そこで働く医師と交流を持つ中で、彼らの熱意、グローバルな働き方に触れ、私も日本に留まることなく国際的に働く医師のキャリアも選択肢として考えられるようになった。

実習では英語が流暢に話せない中で自分の考えをうまく表現できず、何度ももどかしい思いをした。海外では英語はコミュニケーションのツールでしかなく、自分の意見を表現できなければ何も始まらなかった。この経験を経て、自分の意見を持ち、それを表現することが私に足りない力であることを痛感した。そうした力を身に付け、国際的な舞台でも活躍できるような医師になることを目標として、これからも日々努力していきたい。

また、患者さんとの出会いも私に大きな影響を与えた。小児がんを克服して元気に外来に来られる患者さんを見て、その方の頑張りに進んだ医療に感銘を受けた一方、最新の治療でも助からない患者さんを目の当たりにして、たまらなく辛い思いになった。今後、そうした子供たちを一人でも多く救いたいという気持ちが一層強くなった。この気持ちを忘れずにこれからも研鑽を積んでいきたい。

【謝辞】

今回の海外実習に際して、ご支援頂いた岸本先生、岸本交際交流奨学金基金の方々、医学科教育センターの先生方、**St. Jude Children's Research Hospital** の稲葉寛人先生、阪大小児科の宮村能子先生、その他お世話になったすべての方々に厚く御礼申し上げます。